

# ドイツ民族主義宗教運動の「起源」

## —ヘッケルの優生思想と一元論宗教—

宮 嶋 俊 一

### 1. はじめに

ドイツ・ヴァイマル期は文化的・思想的に百花繚乱の時代とされ<sup>1</sup>、そうした宗教・思想状況についても多くの研究の蓄積が存在している<sup>2</sup>。とりわけ宗教状況に目を向けるなら、次のような特徴づけをなされることが多い。まず、伝統的なキリスト教教会において様々な動きがあったことは確かであるにせよ、全体としてみればかつてに比べ制度的な教会はその力を弱めていた。だが、それは「宗教」そのものへの関心が低くなったということではない。むしろ様々な宗教運動・精神運動がキリスト教教会の外部で盛んな活動を見せ、教会外の運動として展開していく。とりわけ民族主義的(フェルクシシュ)な運動は、その後様々な形でナチス政権へ引き継がれていくこととなるが、そうした潮流をやや遡って捉え直すことも必要であろう。

深澤英隆によれば、ドイツ語圏において民族主義宗教運動、新ゲルマン主義宗教運動、あるいは新異教主義運動などと総称される一連の(思想)運動体がドイツ語圏において輩出したのは19世紀の終盤から戦前期にかけてである。そしてこの運動は、20世紀という時代に、キリスト教圏において非キリスト教的な宗教的社会統合を目指した<sup>3</sup>。本稿では、こうした民族主義的潮流の「起源」ともされる、エルンスト・ヘッケル(Ernst Heinrich Philipp August Haeckel)を取りあげてみたい。彼は、1834年ドイツのポツダムに生まれ、1919年にイエーナで没した著名な生物学者・動物学者で、専門領域は放散虫やクラゲなどの下等海産動物の形態学・分類学・

発生学であった。27歳でイエーナ大学の私講師として採用された後、31歳から75歳までの間、同大学の比較解剖学兼動物学の教授として活動した<sup>4</sup>。

イギリスのダーウィン進化論をドイツにおいていち早く受容し、それを基礎にして形態学を体系化した『有機体の一般形態学』<sup>5</sup>を著し、ダーウィンやハクスリーからもその成果を認められた。その後より一般向けの啓蒙書として『自然創造史』<sup>6</sup>、『宇宙の謎』<sup>7</sup>、『生命の不可思議』<sup>8</sup>などの著作を出し、いずれも当時のベストセラーとなった。

ヘッケルはいくつかの業績において、今日においてもその名を歴史にとどめている。彼はダーウィンの進化論に独自の思想を加え「一元論(Monismus)」という哲学思想へと変容させ、それを普及させた<sup>9</sup>。また、「個体発生は系統発生を繰り返す」というフレーズで知られる「反復発生説」を提唱した<sup>10</sup>。さらにヘッケルは「エコロジー」という語の提唱者としても知られている。彼は、「家計」を表すギリシア語の「オイコス」に学問を表す「ロギー」をつけて、「エコロジー」という語を作り出し、それを生物(有機体)とそれを取り囲む外界との関係を扱う総合的な学問として定義した<sup>11</sup>。ヘッケルによれば、当時ドイツで用いられていた「ビオロギー」という語には、生物一般を研究する学問としての広義の生物学という使い方がある一方で、生物の無機的・生物的環境との関連を扱う狭義の使い方もあったため、混同による誤解を防ぐために、狭義のビオロギーをエコロジー、あるいはビオノミーと呼ぶことを提案し

たとされる<sup>12</sup>。

他方で、ヘッケルの社会ダーウィニズム思想は優生思想を生むことともなった。そしてその思想は、ナチスドイツの人種主義へと繋がっていくこととなる。この意味で、ヘッケルの思想は今日において批判的に捉えられている<sup>13</sup>。しかし優生学的思想をただ批判するだけでなく、その思想が生まれてきた文脈を明らかにする作業は不可欠である<sup>14</sup>。ナチズムの思想やその行いが「悪」として批判されることは今日当然とされているが、ただそれを「悪」として断罪するだけでなく、そうした思想の生まれてきた源泉をたどる必要があるのである。

そこで興味深いのが、ヘッケルが晩年に取り組んだ一元論同盟の運動である。ヘッケルは生物学者・動物学者であっただけでなく、宗教家・思想家としての顔も持つ。生物学者・動物学者としてのヘッケルと哲学者・宗教思想家としての彼を切り離して考えてしまうと、ヘッケルという人物の本質を見誤ることとなろう。それらが渾然と結びついているところに「ヘッケル」という人物の独自性を見ることができるのである。上述のごとく、彼の思想は一元論として特徴づけられるものであるが、「一元論思想」は様々な二元論的対立を止揚していくところにその特徴がある。自然科学と哲学・宗教の対立もまた彼にとっては止揚すべきものであった。この一元論「思想」はまた同時に一元論「宗教」でもあった。そしてヘッケルは一元論同盟の運動を通じてキリスト教教会を厳しく批判し、一元論宗教をそれに代わるものとして普及させようとした。世紀末からワイマール期にかけて、既存のキリスト教教会はその力を失い、それに代わり教会外で様々な宗教運動が展開したことは既に指摘したが<sup>15</sup>、ヘッケルの一元論運動もそうした宗教運動のひとつとして捉えることができるのである。

本稿では、まずヘッケルの優生思想の内容を、次に一元論思想を紹介し、さらに彼の一元論運動を当時のドイツにおける宗教状況の中で考えていきたい。

## 2. ヘッケルの優生思想

まずヘッケルの優生思想の内容を見ていこう。上述した通り、ヘッケルはダーウィン進化論、および社会ダーウィニズムの啓蒙的書物を数多く著し、その多くは当時のドイツにおいて人口に膾炙していた。例えばヘッケルの啓蒙的一元論哲学の書である『宇宙の謎』は、当時40万部の売れ行きを見せ、30を超える言語に翻訳されたという。こうしたヘッケルの著作の中から優生主義的な記述を取りあげていこう<sup>16</sup>。

第一に、人種差別主義である<sup>17</sup>。ヘッケルは『自然創造史』のなかで、人種を区別するメルクマールとして、頭髪の形状、肌の色、頭蓋骨の形状を提案し、実際に頭髪の形状から現存人種を12種類<sup>18</sup>に分けている（NS 738-53）。そしてその中で、最も進化し、サルから最も離れた人種が、地中海人種の中のインドゲルマン亜属、つまりヨーロッパ系の白色人種であると考えた。進化論に依拠していたヘッケルにとって、人種間に生命の価値の相違があることは当然であった。では、何が価値の差を生み出すのか。それは、「文化」であり、またそれを生じさせるための高度に発達した「理性」である（LW 449-50.）。

第二に新生児の選別である。ヘッケルは、人為選択（人工淘汰）の好例として、古代スパルタ人の子殺しのエピソードを挙げている。人為淘汰とは、自然淘汰の対語である。つまり、ダーウィンよれば、種は自然環境への適応における生存競争の結果、最適者が残ることによって進化してきた。こうした自然が選択する仕組みに対して、人間が選択を施すのが「人為選択」であって、家畜や栽培植物の品種改良で威力が発揮されてきた。これを人間にも適用しようと言うのである。「人間の人為選択のすばらしい例を古代スパルタ人たちが大規模に提供してくれる。古代スパルタ人たちは、ある特別な法に基づき、生まれたばかりの嬰兒を注意深く点検して選別しなければならなかった。病弱な子どもや何らかの身体的欠陥を持った子供は皆、殺さ

れた。完全に健康で力強い子どもたちだけが生き残ることを許され、彼らだけが後に子孫を残せたのである。それによって、スパルタ人種は、常に卓越した身体の力と能力を保っていただけでなく、世代を経るにつれて身体的な完全性を強めていった。スパルタの人々がまれに見るような男性的力と英雄的力強さを持っていたのは、確かに大部分がこの人為的選択のおかげなのである」(NS 152-3)。

さらに、このような人種改良的な言説に向けられた非難に対して、以下のように述べている。「毎年生まれる数千の不具者、聾啞者、クレチン病者(白痴)、その他不治の遺伝的素質を負った者たちが人為的に命を長らえ、成長したとしても、そこから人類はどのような利益を得るのだろうか。それに、これらの同情すべき人々自身も、その生活からどのような利益を得るのだろうか。彼ら自身及びその家族にも惨めな生涯をもたらさざるをえないような、この不可避の不幸をその始めから即座に断ち切ることは、はるかに理性的で望ましいものではないだろうか」(LW 135-6)。

第三に、犯罪者の死刑確定である。ヘッケルの考えた「文化的生活」における人為選択の「好ましい影響例」として興味深いのは、この死刑である。「確かに、今日なお、死刑廃止は多くの人々にとって『自由主義的処置』だとして賞賛され、誤った『ヒューマニズム』という名において一連のきわめて馬鹿らしい理由が通用している。しかるに死刑は、数多くの矯正不能な犯罪者や無能者に対する正当な報復であるばかりか、人類のより善良な部分をなす者たちにとっては大きな善行になることは真実である。これは、よく耕された庭で植物が繁茂するよう生い茂った雑草を根絶するという行為と同じく、よい行いである。念入りに雑草を抜き去れば、光と空気と土地が高貴な有益植物のものとなるように、すべての矯正不能な犯罪者を容赦なく根絶やしにすることによって、人類のよりよい部分に属する人々にとっては『生存闘争』がかなり軽減されるだろうし、そればかりか、

この人為的な選択によって、多くの利益がもたらされることになるであろう。なぜならば、それによって、退化した人間のくずから、遺伝によってその悪い性質が伝えられる可能性が奪われることになるからである」(NS 154-5)。

第四に、精神病や不治の病人の安楽死である。19世紀の科学の進歩により、人間の個人的かつ社会的な生活が合理的に改善されてきた反面で、社会生活における神経の消耗と身体の過労などが招く文明病(Kulturkrankheiten)が増加したとヘッケルは言う。この場合の文明病とは精神の病である。「特に、神経衰弱と他の神経の病気が毎年多くの犠牲者を出している。精神病の数と規模は毎年増加拡大する。疲れ切った文化人が悪疾から逃れて癒されようとする療養所が至る所に設立されている。これらの悪疾の多くは治癒の見込みのないもので、多くの患者が言語に絶する苦痛のもとで確実な死を待つばかりである。このような哀れな人たちの甚だ多数が、悪疾からの救済を切望しており、苦痛に満ちた生命の終わることを望んでいる。ここにおいて、われわれが同情ある人間として、彼らの願いを叶え、痛みのない死によって彼らの苦痛を短縮することが正当かどうかという重要な問題が生じるのである」(LW 130-1)。

また不治の病人も含めて以下のように述べる。「数十万の治癒することない患者、特に精神病者、ライ病患者、がん患者などは、われわれの現代の文明国にあって、人工的に生命を維持され、絶え間ない苦痛を入念に延長されるが、それは自己自身にとっても社会全体にとってもなんら有益ではない」。さらに、治癒の見込みのない精神病者には一種のモルヒネによって安楽死をもたらすべきだと述べるが、ただし「この同情的かつ理性的な行為はただ一人の医師の裁量に任せて秘密裏に行われてはならないのであって、信頼に足る良心的な医師たちの委員会の決定によってなされなくてはならない」としている。同様にがんのような苦痛を伴う不治の疾病の場合は「患者自身がはっきりと自らの希望によることを示し、場合によっては希望を法

律的な書類に記録した後に、宣誓した委員会の手によって」、無痛の即効性の毒薬によって安楽死させるべきであると述べている (ibid.)。

第五に自殺の肯定である。これは第四の安楽死と共通する考え方である。ヘッケルによれば、自殺は特に宗教的な理由から重大な罪悪とされているが、そもそも人間の生命は「神よりの賜り物」などではなく、卵細胞と精子細胞の偶然の出会いによって生じたものであり、このような偶然の結果生まれた人がもし苦渋の人生を余儀なくされたとしたら「人は任意の死によって、そのような苦痛を終結させる権利を有する」のは当然だとされている (LW 124-5)。後述するようにヘッケルはキリスト教思想に対決する姿勢を見せるが、キリスト教の教義から解放された個人は、自分の身を自分の意志でいかにしてもよいとする一方で、それはまたキリスト教倫理においても「救済」として尊ばれるものであるとする。従って、自己の決定による故意の死である自殺とは「自己救済の一行為」であり、同情に値するものであって、軽蔑されてはならない行為であるとヘッケルは述べる。

以上の5つの特徴を踏まえ、佐藤はヘッケルの優生思想の共通項として、1. ダーウィンの自然選択説に基づいた生存競争の肯定、2. 近代文明の弊害としての平等と博愛の思想、そして3. 医学の発達をもたらした逆淘汰への批判という3点を挙げているが、ここでは第1の項目について取りあげておきたい。

ヘッケルの優生学的言説の根底にあるのはダーウィンの自然選択説であるが、これは「環境の変化に対して生物の種がどのように適応するか」の説明であって、それによれば新しい環境に最もよく適応した個体が生き残って繁殖する一方で、適応度の劣る個体は除去され、これが何世代にもわたって繰り返されると適応形質が増大して個体群は新しい種になる<sup>19</sup>というものである。そして「ダーウィンの自然選択が本質的にランダムで無方向なものであり、進化は無目的的で全く予言不可能な過程とされる」のに対し、ヘッケルの「生存競争による適者生存」

のルールはこれとは大きく異なっている。つまり、ヘッケルの考えでは、自然界のあらゆる生物の進化の段階の最先端にいるのは人類であり、ここに人類至上主義に裏打ちされた目的論的世界観が現れ出ている。それだけではなく、同じ人類であっても、そのなかには進化の遅れた劣等な人種もあり、そうした人種は生存闘争によって淘汰される宿命にある。結果として優秀な人種のみが生き残り、さらに進化の段階を進む。それはさらに、同じ優秀人種の中に存在する劣等な個人にも当てはまることになる。ここでの劣等の基準は身体的な脆弱さ、精神的能力の遅れを意味し、特に脳の発達度を示す「理性」の段階を「生命の価値」の段階と連動させて考えている、よって理性の発段階の遅れている人間は、生存闘争によって自然淘汰されていくものという暗黙の前提があり、それゆえに「野蛮人」や犯罪者や精神病患者への冷徹なまなざしが生じることになるのである<sup>20</sup>。

### 3. ヘッケルと一元論思想

ここまで佐藤の論攻に依拠しつつ、ヘッケルの優生思想の内容についてまとめてきた。ここではヘッケルがダーウィンの進化論を吸収しながらも、独自の社会ダーウィニズム論へと変容させていたことが明らかとなった。社会ダーウィニストとしては英米系の思想家たちが有名であるが、ドイツにもその太い流れが存在しており、ヘッケルはドイツにおける進化論啓蒙の最大の功労者である。ただし、ヘッケルの進化論解釈は独特のものであった。ガスマンはヘッケルのダーウィニズムをヘッケル主義として定式化しているが、それを特徴付けるのがヘッケルの一元論思想である。次にこの一元論思想について見ていきたい。

ヘッケルの一元論思想はヘッケルのキリスト教批判と深く結びついている。彼はキリスト教に代表される二元論を徹底的に批判し、自然科学に立脚した一元論によってそれを打ち破ろうとした。哲学的な一元論とは、「世界に真に実

在するものはただ一つのものである」という立場の考え方であり、西洋哲学史においてはパルメニデスを嚆矢として、プロティノス、ペーメ、ブルーノ、ホッブス、スピノザ、シェリングらに継承されていった。それでは、ヘッケルの一元論における「真なる実在」とは何であろうか。ヘッケルは一元論を以下のように説明している。「われわれの一元論は、全自然を統一的に理解しようとするものである。(中略)われわれは、すべてのものには精神が住まい、認識できるすべての世界は、ある共通の基本原則に従って存在し、かつ進化しているのだと確信している。そこで特に強調したいのは、無機界と有機界は根本的に単一のものであり、有機界は無機界から進化してきたということだ。無機界と有機界にはほとんど明確な差がないのと同様に、植物界と動物界、さらに動物界と人間界の間にも絶対的な差異はないのである」(MB 9-10)。

こうした発言からわかることは、ヘッケルの一元論における「真なる実在」とは、無機界と有機界の区別なく普遍的な法則によって統一されている自然(宇宙)であり、その普遍的な法則、あるいは宇宙そのものがヘッケルの考える神、あるいは靈魂である<sup>21</sup>。

ヘッケルはこの科学に基づく純粋な統一的世界観を核にして、キリスト教に代わって真・善・美を追求する「一元論宗教」<sup>22</sup>、および利己性と利他性のバランスをとろうとする本能に従った「一元論倫理学」を打ち立て、それを学校教育を通じて普及させ、調和的で理想的な文化社会を樹立することを主張した。こうした思想は19世紀末の自然科学主義のひとつと考えることができる。自然科学主義とは、「人間のふるまいやその社会までを含む一切の現象を非擬人主義的、否超自然主義的、非目的論的、自然科学的に統一的に解釈しようとする哲学的傾向のこと」であり、「具体的には、唯物論、一元論、自然主義、実証主義、自由思想、不可知論、合理主義などとよばれたものの基本に共通して流れる哲学的傾向」であり、「それまでのキリス

ト教的世界解釈に対する一群の経験論的な代案」<sup>23</sup>なのである。そしてこの19世紀的自然科学主義のなかでも、とりわけ優生学は「超越論的な世界解釈から離脱し、その上で新興の自然科学によって人間が自らその運命を改良しようとする意図を強く持っていたという意味で」、「キリスト教的救済史観の世俗化」でもあった<sup>24</sup>。

なお、ホルトによれば、ヘッケルの一元論宗教には4つの段階があるという<sup>25</sup>。第1の段階は、1860年代から1877年にかけて、ヘッケルがダーウィニズムの普及家として自らを確立していった時期である。その時代には一元論については直接の言及はなく、あっても散発的であり、それは機械論、あるいはスピノザやブルーノの見解に依拠した汎神論、さらに「自然宗教」として描き出されていた。第2段階は1878年から1890年にかけてである。この段階ではヘッケルが自らの体系に物活論を導入したことによって、一元論の汎神論的性格が拡大した。ヘッケルは観念論と唯物論、精神と物質を統合する、新たな「非思弁的」自然哲学としての一元論を展開した。第3段階は1890年から1904年にかけてであり、一元論は科学と宗教をつなぐものとして定義された。『宇宙の謎』では、あらゆる神性の代替物として、実体の一元論的法則が導入された。最後の段階は、ヘッケルが1904年からヘッケルの死、すなわち1919年までであり、一元論において神への言及が再び増加し、新たに一元論宗教が形成された。晩年において、唯物論、機械論、物活論、観念論、さらには生氣論を混合した一元論宗教が形成されたのである。

#### 4. ヘッケルの一元論同盟運動

最後に一元論同盟の動きを見ておきたい。一元論同盟の成立は1906年のことであるが、ヘッケルが一元論普及のための組織を思いついたのはもう少し早く、その2年前にローマで開催された「国際自由思想会議」の席上でヘッケルは「一元論のための30カ条」という構想を明らか

にしていたと言う。その後も、ヘッケルは組織設立のイニシアティブを握っており、同盟の設立集会はイェーナ大学の動物学教室で開かれ、また本部もそこに置かれた。ただし、ヘッケルは70歳を過ぎた高齢のために会長には就かず、代わってプレーメンのプロテスタント牧師カルトホフが会長となり、その後会長職は頻繁に交代した。

この一元論同盟に対しては、その後のナチズムへと連なる神秘的、秘密結社的なオカルト的団体という見方がされている<sup>26</sup>。既に指摘したとおり、ヘッケルの主張の中には人種の優劣や靈魂の偏在といったものも含まれており、また安楽死を含む人間の選別などに対しても肯定的な発言をしている。

だがそのようなヘッケル自身の思想だけでなく、その活動の参加者にも注目する必要があるだろう。一元論同盟創立参加者には<sup>27</sup>、優生学者ヴィルヘルム・シャルマイヤー、フェルキッシュ運動<sup>28</sup>団体フリードリヒスハーゲン・サークルに属するブルーノ・ヴィレとヴィルヘルム・ベルシェ、雑誌『ユージェント』の編集者ゲオルク・ヒルト、青年運動につながるヴィルヘルム・シュバーナー、やはり青年運動のルートヴィヒ・グルリットらが名を連ねている。またヘッケルの影響を受けた者として、優生学のルートヴィヒ・ヴォルトマンもいる。こうしたメンバーを見るなら、確かにそうした分析も可能となる。

さらには、この一元論同盟には『世界舞台』紙の編集長であり、急進民主主義者であったオシエツキ、戦闘的女性解放論者ヘレーネ・シュテッカー、さらに神智学から人智学を創出したルドルフ・シュタイナーにも参加している<sup>29</sup>。

このように見てくると、この一元論同盟は当時の諸々の宗教的運動の「吹き溜まり」的集団であった。もちろん、そうした雑多な人々の共通項を探っていくことはできる。そのひとつは、上述の自然科学主義である。すなわち、自然科学的、あるいは生物学的・進化論的な認識をメンバーの多くが共有していた<sup>30</sup>。そしてその結

果として、一元論同盟がキリスト教勢力との闘いというヘッケルの意志を継承した反キリスト教運動団体であり、国民を教会から離脱させることを中心的な行動目標の一つとしていたという見方もまた成立するのである<sup>31</sup>。いずれにしても、一元論同盟の運動はキリスト教教会が力を失った中でいわば宗教的空白状態において発生した様々な運動のいわば台風の目としての役割を果たしていた。

だがそうした雑多性の中にあってもヘッケルは一元論をより「宗教」らしく整えようとしていた。例えば、ヘッケルは太陽崇拜を唱え、またギリシア神話のミューズや天文学を司るウラニアを祭壇に立て、さらに女神の周囲に顕微鏡、望遠鏡、プラネタリウムなど科学研究器具を祭った神殿を構想している。そして一元論典礼を制定し、洗礼、成人式、結婚式、葬儀などをそれに従って行い、そのための一元論祭司を任命するということを主張した<sup>32</sup>。こうしたヘッケルの主張は参加者たちに論争を巻き起こした。上述の構想は結局実現しなかったものの、冬至と夏至には田園に出かけ、自然の再生を祝う祝祭が行われ、参加者たちは次のような祈禱を唱和した。「われらはおよそ太陽の子なり。その胎内より地球は生まれいでたり。自然の永遠なる法は、われらをしてその圏内にとどまらしむ。広大無辺の宇宙は冷徹にして無明なり。わが輝ける母なる太陽は、われらに実りを与えつつ、純然にて真実の生命の元素とて顕現せり。かくてわれらが祖先は、これを知りたるがために、太陽が天かけるその勝利の軌道を歩みたるを知りて欣喜したり。厳冬の間、深く閉ざされし木々の緑は今、ヴォーダンの神に奉獻されたりと知りしためなり」<sup>33</sup>。竹中亨はこのヴォーダンがゲルマン神話の主神であり、またこの祭儀が古ゲルマンの習俗にならっていることに注目し、そこに一元論宗教のゲルマン異教化という動きを見いだしている<sup>34</sup>。

## 5. 結語

本稿で確認してきたとおり、ヘッケルの優生思想は19世紀末の「自然科学主義」的思想潮流の中に棹さすものであり、ダーウィン進化論を摂取・変容させることで生まれた社会ダーウィニズム思想のひとつと捉えることができる。またヘッケルの思想が一元論思想としてまとめられていく中で、科学と宗教が融合していくこととなった。キリスト教を厳しく批判しながらも、一元論同盟という宗教運動へと結実していったのである。19世紀末から20世紀にかけてキリスト教教会がその力を弱めていったが、他方「宗教的なるもの」を希求する人々が教会外で様々な宗教運動を起こしていった。ヘッケルにより生まれた一元論同盟はまさにこうした運動の一つでもあり、当時の様々な宗教運動の潮流がこの運動に「吹き溜まって」いたと言える。だが、その宗教運動はゲルマン異教的色彩を帯び、科学と宗教が融合する中から生まれた優生思想と結びつく形でナチズムへと吸収されていったのである。

\*本稿は医学哲学・倫理学会関東支部第190回総合部会例会（2010年5月8日、於芝浦工業大学豊洲校舎）の発表草稿（『医学哲学と倫理』第8号〔2011年3月発行予定〕に掲載）に大幅な加筆修正を行ったものである。

## 注

<sup>1</sup> 例えばゲイ、ピーター（亀島庸一訳）『ワイマール文化』みすず書房、1970年を参照。

<sup>2</sup> とりあえずここでは、生松敬三『二十世紀思想渉獵』青土社、1981年、および上山安敏『神話と科学—ヨーロッパ知識社会 世紀末～20世紀』岩波書店、2001年を挙げておく。

<sup>3</sup> 深澤英隆『啓蒙と霊性 近代宗教言説の生成と変容』岩波書店、2006年、240頁。

<sup>4</sup> ヘッケルの生涯については、Krauße, Erika, *Ernst Haeckel*. 2.Aufl., Teubner Verlag, 1987が詳しい。

<sup>5</sup> Haeckel, *Generelle Morphologie der Organismen. Allgemeine Grundzüge der organischen*

*Formenwissenschaft, mechanische begründet durch die von Chares Darwin reformirte Descendenztheorie*. 2 Bde., Georg Reimar Verlag, 1866. なお同書からの引用は GM の略号を用いて記す。

<sup>6</sup> Haeckel, *Natürliche Schöpfungsgeschichte. Gemeinverständliche wissenschaftliche Vorträge über die Entwicklungslehre im allgemeinen und diejenige von Darwin, Goethe und Lamarck im besonderen*. Georg Reimar Verlag, Berlin 1868. 本稿作成には1909年版（11.Aufl.）を用いた。同書からの引用は NS の略号を用いて記す。

<sup>7</sup> Haeckel, *Die Welträtshel. Gemeinverständliche Studien über monistische Philosophie*. Alfred Körner Verlag, 1899. (田辺振太郎・山口潜訳『宇宙の謎』河出書房新社、1961年、世界大思想全集社会・宗教・科学思想編所収。)

<sup>8</sup> Haeckel, *Die Lebenswunder. Gemeinverständliche Studien über biologische Philosophie. Ergänzungsband zu dem Buche über die Welträtshel*. Alfred Körner Verlag, 1904. (後藤格次訳『生命の不可思議』岩波文庫上下巻、1928年。)

<sup>9</sup> Haeckel, *Der Monismus als Band zwischen Religion und Wissenschaft. Glaubensbekenntnis eines Naturforschers vorgetragen am 9. Oktober 1892 in Altenburg beim 75jährigen Jubiläum der Naturforschenden Gesellschaft des Osterlandes*. E. Strauss Verlag, 1892 (Alfred Körner Verlag, 1908). 本稿作成には1908年版を用いた。同書からの引用は MB の略号を用いて記す。

<sup>10</sup> 「反復発生説」については、柴山英樹「ドイツにおけるダーウィニズムと教育思想——エルンスト・ヘッケルの反復発生説を中心に——」『教育学雑誌』第39号、2004年105–18頁を参照。

<sup>11</sup> 佐藤恵子「エコロジーの誕生——背景としての E・ヘッケルの学融合的な思想」『東海大学文明研究所紀要』第21号、2001年、57–71頁、および拙稿「エコロジー」『生命倫理事典』太陽出版、2010年、128–9頁を参照。

<sup>12</sup> GM1 8, LW 88. 佐藤前掲論文61頁。

<sup>13</sup> ヘッケルの思想とナチズムとの結びつきを強調した研究として、Gasman, Daniel, *The Scientific Origins of National Socialism. Social Darwinism in Ernst Haeckel and the German Monist League*, Transaction Publishers, 2007 (Originally published in 1971 by Macdonald and American Elsevier).

<sup>14</sup> ドイツの優生学史の研究動向については、鈴木善次・松原洋子・坂野徹「展望 優生学史研究の動向(Ⅱ)」『科学史研究』第Ⅱ期第31巻 (No. 182) 1992年、65–70頁を参照のこと。また、米本昌平・

松原洋子・棚島次郎・市野川容孝『優生学と人間社会 生命科学の世紀はどこへ向かうのか』講談社、2000年も参照。

<sup>15</sup> 当時のキリスト教教会の状況については野田宣雄『教養市民層からナチズムへ——比較宗教社会史のこころみ』名古屋大学出版会、1988年参照。また、キリスト教教会外の様々な宗教運動については深澤英隆前掲書、185-205頁を参照のこと。なお、同書でも引用されている『偽装宗教』は1924年にドイツで出版され、同時代の「宗教的流行現象」を皮肉的に描写した書物だが、そこで言及されている活動を列挙すると、世界観哲学(カイザーリング伯、シュペングラーなど)、同性愛運動、性格学・筆跡学、数秘術や数々の占い、『シェイクスピアはベーコンである』運動、肉食主義と自然回帰、『ファウスト』釈義、ドイツ偉人崇拜、反ユダヤ・反フリーメーソン主義、ゲルマン人種主義、ファシズム、コミュニズム、表現主義、青年運動、平和運動、未来テクノロジー信仰、セクソロジー、女性解放運動、精神分析とセラピー、スピリチュアリズム、予言、ノストラダムス解釈、シュタイナーの人智学、エスペラント運動、リズム体操など、まさに百花繚乱ぶりを示している。Bry, Carl C. *Verkappte Religion*, (3. Aufl.), Leopold Klotz Verlag, 1925、深澤前掲書189頁。

<sup>16</sup> 佐藤恵子はヘッケルの優生学的な言説を「人種差別主義」「新生児の選別」「犯罪者の死刑肯定」「精神病者や不治の病人の安楽死」「自殺肯定」という5つの観点からまとめているが、本稿の既述もそれによっている。佐藤恵子「ヘッケルの優生思想」『東海大学紀要 開発工学部』第10号、2001年、1-12頁を参照。

<sup>17</sup> ヨーロッパの人種主義の歴史におけるヘッケルの位置づけについては、Mosse, George L. *Die Geschichte des Rassismus in Europa*, Fischer Verlag, 1996, S. 109-11.

<sup>18</sup> パプア人種、ホッテントット人種、ニグロ人種、カフィル人種、マレーシア人種、モンゴル人種、北極人種、アメリカ先住人種、オーストラリア人種、ドラヴィダ人種、ヌビア人種、地中海人種。

<sup>19</sup> 佐藤前掲論文、8頁。

<sup>20</sup> 同上、8-9頁。

<sup>21</sup> 米本昌平『遺伝子管理社会』1989年、弘文堂、52-3頁、および佐藤恵子「Der Deutsche Monistenbund und die Kirchenaustrittsbewegung——ドイター元論同盟と教会離脱運動」『津田塾大学紀要』第31号、1999年、291-309頁、特に294頁を参照。

<sup>22</sup> ヘッケルの一元論宗教については、Holt, Niles R., Ernst Haeckel's monistic religion., in: *Journal of the History of ideas*, 1971 Apr-Jun; 32(2): p.265

-80を参照。

<sup>23</sup> 米本前掲書、44頁。

<sup>24</sup> 同上、46頁。

<sup>25</sup> Holt, op. cit., p.267-8.

<sup>26</sup> こうした見方を示した文献として横山茂雄『聖別された肉体 オカルト人種論とナチズム』書肆風の薔薇、1990年。

<sup>27</sup> 以下に、創立時の参加者氏名を記す。J. D. Alfken, 教員, Bremen. - M. H. Baege, 大学助手, Friedrichshagen. - C. A. Bermann, München. - Wilhelm Bölsche, Friedrichshagen. - Dr. W. Breitenbach, Brackwede. - Ritter Dr. Bartholomäus von Carneri, Marburg a. d. Drau, Steiermark. - Christian Carstens, 工場所有者, Hamburg. - Professor Dr. Arnold Dodel, Lugano. - C. Eberle, 音楽教師, 一元論読書会代表, Neu-Ulm. - Professor Dr. August Forel, Chigny bei Morges. - R. H. France, 在野研究者, München. - Dr. Karl Hauptmann, Schreiberhau. - Gustav Herold, 彫刻家, Frankfurt a. M. - Dr. Georg Hirth, 雑誌『ユーゲント』編集者, München. - Dr. Johann Johannsen, 編集者, Frankfurt a. O. - Otto Juliusburger, 上級医師, Steglitz. - August Kahl, Hamburg. - Dr. Albert Kalthoff, 聖マルティニ教会牧師, Bremen. - Friedrich Kaufmann, 工場主, 一元論協会代表, Leipzig. - Professor Dr. Konrad Keller, Zürich. - Walther Keller, 出版書籍販売業(フランク出版書籍販売), Stuttgart. - Dr. Gustav Krauseneck, Triest. - Oskar Mauritz, 大聖堂説教師, Bremen. - Dr. H. Molenaar, 雑誌『実証の世界観』編集者, München. - Fritz Freiherr von Ostini, München. - Dr. Otto Plarre, Gera. - Professor Dr. Ludwig Plate, Berlin. - Anton Pretzlik, ヘッケル-ゲマインデ代表, Salzburg. - Albrecht Rau, 作家, München. - Dr. jur. Paul Rottenburg, Glasgow. - Dr. Wilhelm Schallmayer, 医師, München. - Dr. Heinrich Schmidt, Jena. - Karl Scholl, 自由宗教説教師, München. - Wilhelm Schwaner, 雑誌『民衆先導者』編集者, Berlin. - Professor Dr. Richard Semon, München. - Dr. med. Friedrich Siebert, 開業医, München. - Dr. August Specht, Gotha. - Friedrich Steudel, 聖ランベルティ教会牧師, Bremen. - Professor Franz v. Stuck, München. - Hermann Sudermann, Berlin. - Rittmeister a. D. von Tepper-Laski, Berlin. - C. H. Thiele, 在野研究者, Jena. - Wilhelm Umrath, 工場所有者, Prag. - Dr. Johannes Unold, 商業学校教員, München. - Dr. Bruno Wille, Friedrichshagen. - Professor Dr. H. E. Ziegler, Jena. Schmidt, Heinrich: Die Gründung des Deutschen Monistenbundes. In: *Das monistische Jahrhundert*. Heft 22, 1913, S.740

-50, hier S.749.

<sup>28</sup> フェルキッシュ運動についてはモッセ, ジョージ・L. (植村和秀・城達也・大川清丈・野村耕一訳)『フェルキッシュ革命—ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ (パルマケイア叢書)』柏書房、1998年を参照。

<sup>29</sup> Gasmann, op. cit., Chapter 7. シュタイナーへの影響については、ヨハネス・ヘムレーベン (河合増太郎・定方昭夫訳)『ルドルフ・シュタイナー』工作社、1977年、79-89頁、およびルドルフ・シュ

タイナー (伊東勉・中村康二訳)『シュタイナー自伝—わが人生の歩み』人智学出版社、1983年、第I巻、219-23頁を参照。

<sup>30</sup> 竹中亨『帰依する世紀末—ドイツ近代の原理主義者群像』ミネルヴァ書房、2004年、263-4頁。

<sup>31</sup> 佐藤前掲論文 (「ドイツ一元論同盟と教会離脱運動」) 参照。

<sup>32</sup> 竹中前掲書273頁。

<sup>33</sup> Gasmann, op. cit., p.68ff.

<sup>34</sup> 竹中前掲書274-83頁。